次の中庸の一とを考へてみねばならぬが、この所は三命とはその形がちがつて
「子日」として
ゆくからず
載せてはあるが、さうでない
ゐる。孔子のことばも含まれてゐる部分がかなりに多く、孔子のことばとも路や
とあるもの
三命の元のことは、わかつて、何かの思想をまかに決めてあるものがあり
衰微を討していつたことのやうなのでゐるものがある。もつとも、孔子のことばとさう
でないところとのきかひめがはつきりしないはあひがあるので、孔子のことばがどれだけ
せず、
であるかのわかりがねるはあひもあるが、これらの二つの部分のあることは、明かである。
「明平郊社之礼、禘嘗之義、治国其如示諸掌乎」
これらのことのつゞきは
漢儒の直作のしかた参照
その二つがいりまじつてゐる。ところがこの論の「孟子」や「荀子」からとつた
「今車同軌、書同文」とあやう
「明平郊社之礼、禘嘗之義、治国其如示諸掌乎」
「律天時」
「車同軌、書同文」は史記
の始皇帝紀に
ものである
あてはまる
世の
歴や時令の思想が儒家のとり入れられてゐた
（次頁へ）

「不尺而章、不動而変、無為而成、」を天地の道として、あるゆうに、道家の思想を
そのまくにいひあらはしたものである。また

はじめの章の
「天命之謂性」と「率性之謂道」が、淮南子の繆稱訓の「性者所受於天」と齊俗訓の「率性而行、謂之道」とから来てゐる。
道家の思想が含まれてゐるらしく、また
あとのほうに

中庸原のは或は史記からこの語をとつたのかもしれぬ。（史記のは「書同文字」とあつて、これは始皇が琅邪に立てた石に刻させたとゆふ文のうちの「同書文字」によつたのであらうが、お漢時代においてこのことが秦代のみのこととして考へられてゐなかつたことは、漢書の蘇文志の小学の條に「古制、書必同文」と記してあるのでも、明かである。これは、いはゆる「古」を天下が統一せられてゐたものと見て、今の世のありさまをその古に反映させたところから、いはれたことである。）

岩波書店 20×10

しかし、よし子思子のうちにあみこまれてゐたにしても、

◎かあみこまれてゐたとしても、その中庸篇が礼記のうちの篇としてのそれと同じであるのであるとは、鄭玄が礼記の中庸篇をつけてそれを子思の作といつてゐることから、知られる。前漢時代の思想の含まれてゐることの明かなこの篇を、鄭玄が子思の作と思つてゐたのは、今日から見ればこのしきのやうでもあるが、思想の歴史的変遷ということを考へなかつたむかしの学者としては、むりの無いことであり特に。△

何の根據もないのであるから、何よりもまづかうきめてかゝることができるかどうかを考へなければならず、さうしてそれを考へるには、子思子が漢時代のあつたとしつゝものが、先秦時代の作品に偽へられてゐたものであるかどうかを、漢時代の學者の一般の態度と、そのうちに含まれてゐて全文が今に傳はつてゐる中庸篇そのものの内容と、並に中庸篇と同じく礼記にあみこまれてゐるほかの諸篇の書きかたや思想とを、それぞれ、すべてみなければならぬ。ところがその逆に、子思の作であることを動かぬものとし、それを前提として、中庸篇を見ますに「子思作中庸」とよく五字があるが、これはその書きかたから見て、史記とすれば、そこからこの篇に対するいろいろの問題が起つて来るのである。にもとからあつたものとは考へられぬ、ということを曾て説いておいた（前漢の儒家と陰陽説参照）。

中庸篇の書かれたのは、史記の内容から考へると、淮南子や礼記にあみこまれてゐる。

中庸篇のなりたちやくみたてについて疑問の起ることは、なく、今傳はつてゐるまくの形で、初から書かれてゐたものとして、何の妨げもそりのである。

中庸篇と前漢時代に書かれたものであることは、これまで説いて来たところで明かなかつたと思ふ。

漢志の子思子がどういふものであつたかは、今からは殆どわかりかねる。

子思のことはといはれてゐたものが、戦国時代にいくらか傳へられてゐたらしく、それは「荀子の非十二子篇に子思の思想に対する批評がしてあり、韓非子の顕學篇に儒家の学派の一つとして子思のそれがあつたやうに記してあることからも、おしはかられる。それらが果してほんとうの

（次へ）

岩波書店 20×10

「孟子」の離婁篇の下、第一章篇の下、韓非子の難篇の三、呂氏春秋の當應覽當應篇
などに、子思のついその逸説とも、いふべきものが見えて居て、そこに子思のことなども含まれて
ゐることが、思ひあはされよう。

次頁行

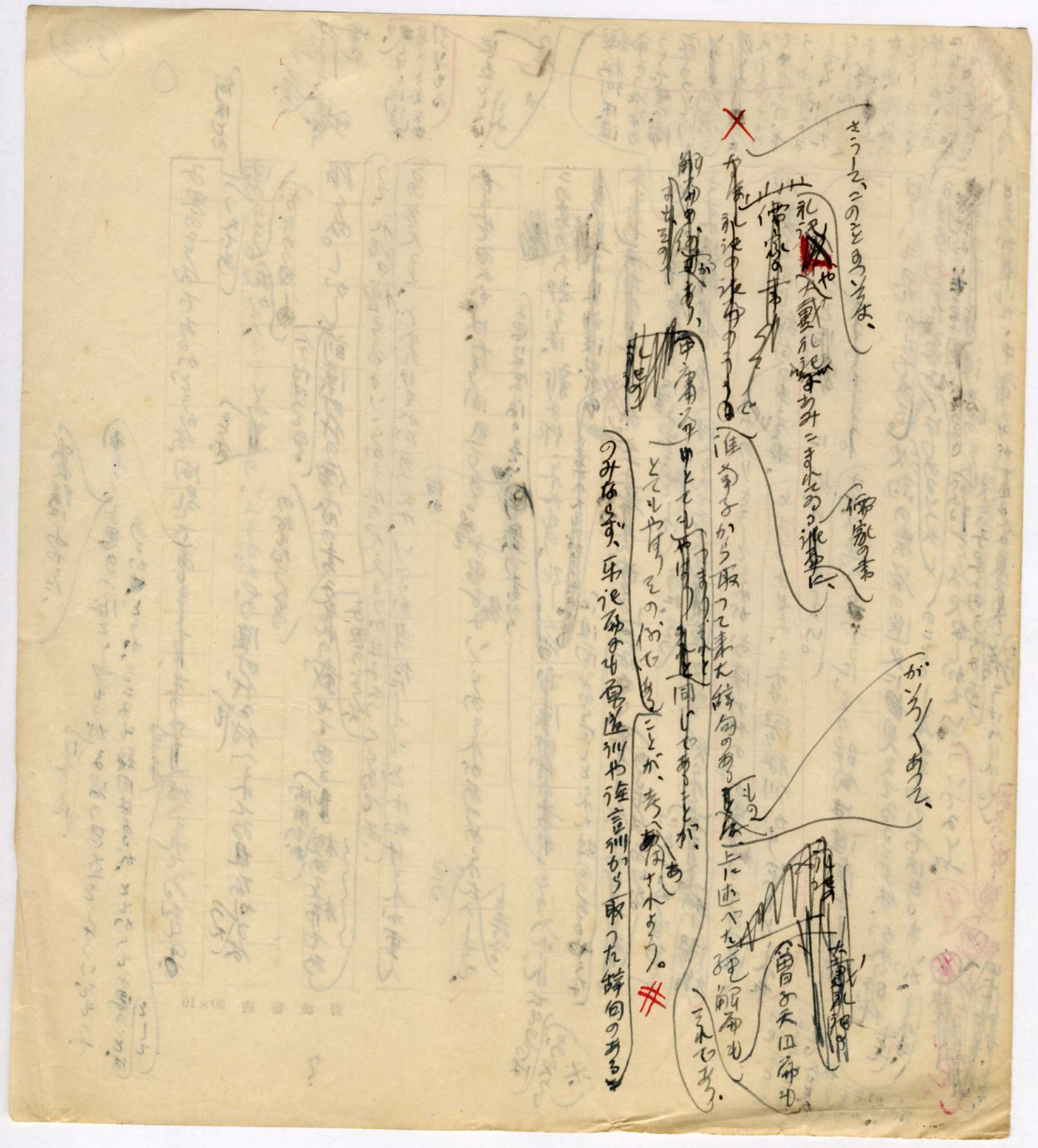
※あるまいか。檀弓篇に見えるものは、この書の全体が、喪に関する礼のこまかな説を述べられ
やうになってから後に作られたものであることから考へても、そこに記してある孔子などのことなど
共に、ふるくから傳へられてゐたものとは思はれないこと、また説苑の建本篇にある子思のことなどが、
上のいろいろのある「荀子」の勧学篇の辞句のよしくいひかへられたものであること、などが、このことに
ついて考へあはされねばならぬ。（説苑では立節篇も子思の逸説が記してあるが、それは「孟子」
などにあるのと同じ性質のものであるから、先秦時代の書に由来のあるものであらうか。）から考
へて来ると、子思子の

次頁へ

うちに、中庸篇の除かれ、前漢時代に書かれたものの含まれてゐることが、おのづからおし
はかられよう。

しかしまた坊記などの三篇が漢志の子思子に含まれてゐたとしても、内容の上からは、さし
さはりは無い。前漢時代に書かれた中庸篇がそのうちにあったとすれば、同じ時代にできた
かの三篇が同じやうにそのうちにあってもよいからである。

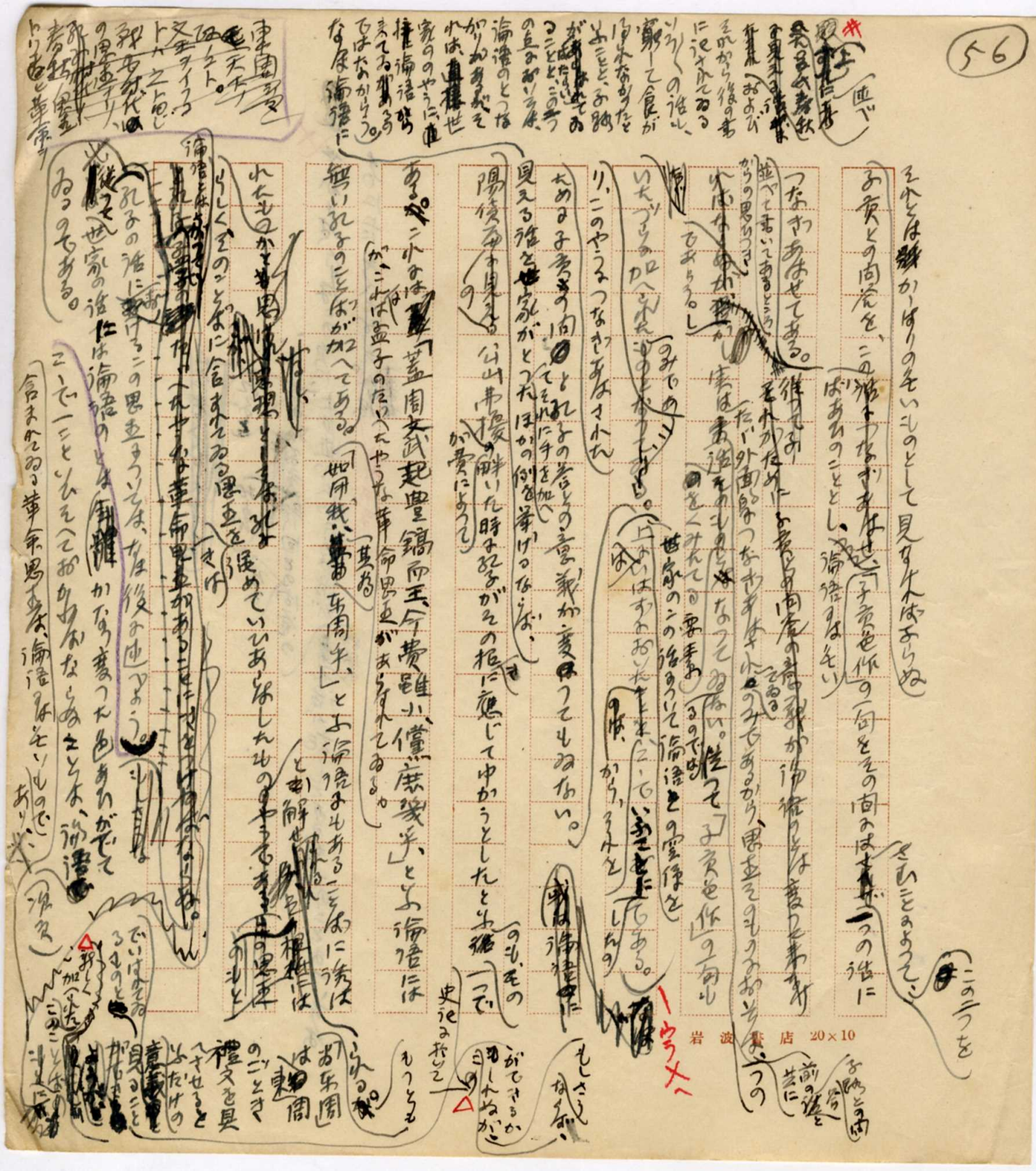
岩波書店 20×10



岩波書店 20×10

別神(2)

岩波書店 20×10

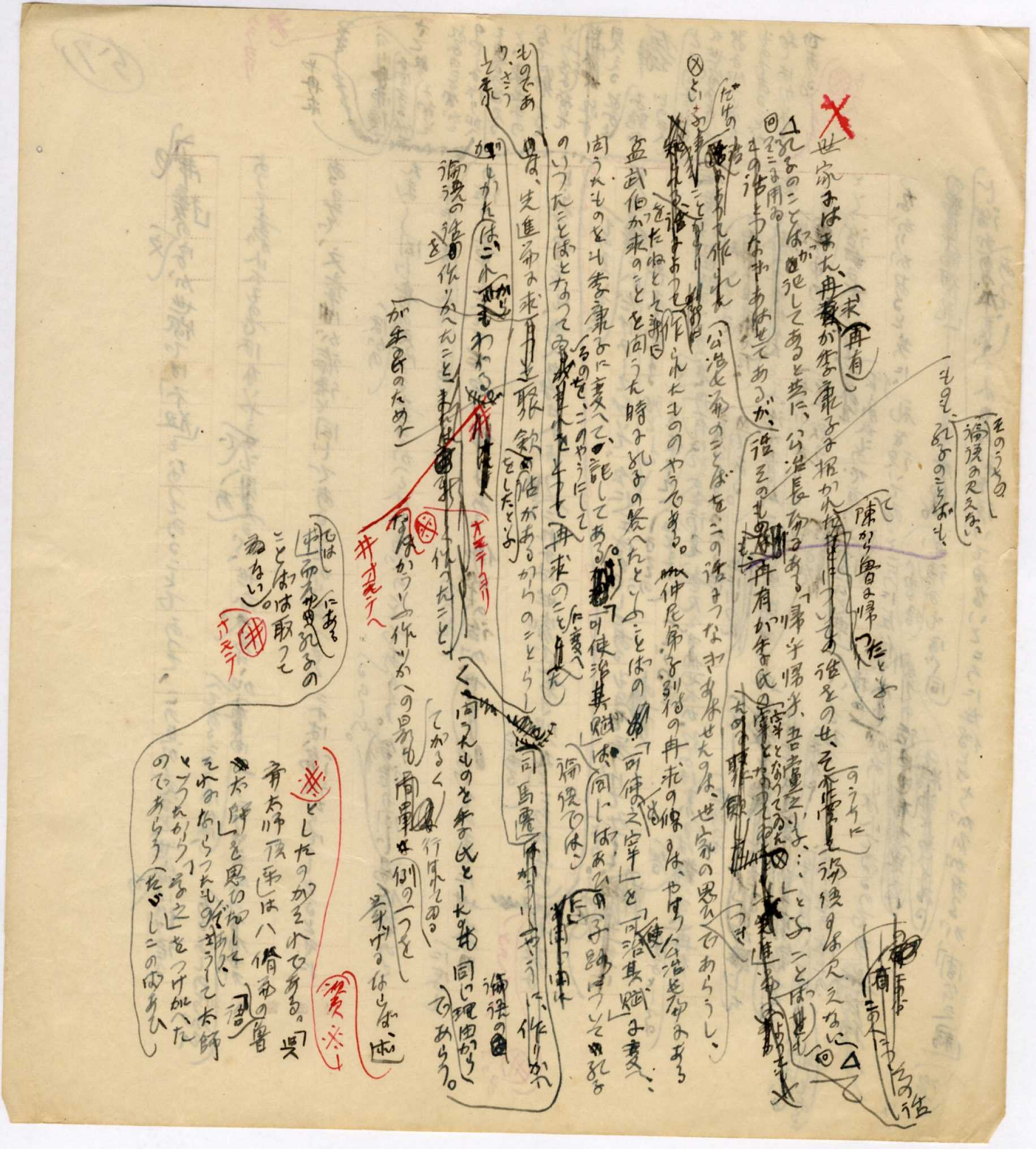


「弗擾」の字が世家では「不狃」となつてゐることであつて、この点から見ると、世家は論語に
よつて書きかへたものではないやうでもあるが、世家は書き加へてあることのほかは、一つ二つの文字のあるなしのちがひが
あるので、文章が論語と同じであることから考へると、これは、論語から写しとるときに
たまたま同じ音の文字に書きかへられたまでのことであるらしい。論語の同じ陽貨篇の
の話の一章をへだてた次の章にある佛肸の話が、ほぼそのままに世家にとられてゐることも、考へあはすべきであろう。これは世家で書き加へたところが多い

（やや冉求 [illegible] 公山弗擾の話 [illegible]）

[illegible]

見える。これだけにおそ、次に左伝を写してあるものを挙げてみると、
冉求に関する話として [illegible] 冉有は孔子を [illegible]
季孫が田賦のことを冉有に [illegible] 哀公十一年にある話 [illegible]
対して [illegible] 冉有 [illegible] 難じた
とい [illegible] 周公之典」をいつてゐるところに左伝 [illegible]
とふ話が本づいてゐると共に、礼を説いてゐるところに左伝との [illegible]
ながりがあるとこころは論語の話との [illegible]
の [illegible] 話が [illegible] 礼を説いてゐないところに左伝とのちがひがあるが、「周公之 [illegible]」



岩波書店 20×10

岩波書店 20×10

なほつゞきにいひそへておくべきことは、論語の孔子のことばを弟子のとして作った話のあることである。前漢時代に書かれたものらしい「荀子」の子道篇にある、知者と仁者とのことを子貢と顔淵とにいはせて、三人の人から聞きそれぞれ孔子が評したとしよ、話がそれである。これは、顔淵篇の樊遅の問に対して仁と知とを説いてきかせたとしよ、孔子のことばによって作られたものであるをか、知すは知をいひ、仁すは愛をいつてゐる。三人のことばによってわかるので、特に子貢のは、論語の孔子のことばのまゝである。孔子のことばの用ゐかたはちがふが、それを用ゐて話を作ったその作りかたは同じである。さて上にいくかの例を挙げた。